

at の意味論的考察

文学研究科英文学専攻博士後期課程満期退学

木内 修

0. はじめに

本稿は辞書や文法書の原則論を適用しても、その使い分けに困難が生じている前置詞 at の用法をコア・ミーニングの「点」という概念を導入して、更に「点」というものの理解の仕方を提示し、一見バラバラになった諸用法を体系的に説明することを第一の目的とする。内容語と異なり、機能語は文脈にあわせて意味・解釈が収斂していくので、その収斂過程のどの段階を語義として認定していくのかで、辞書ごとに違いが出てくるのであろう。

コア・ミーニングは、文脈に左右されない意味である。よって、いかなる句や文レベルにおける解釈においても、コア・ミーニングはその語の解釈を考える出発点として有効なのである。

江戸時代から言われ続けている故事俗信に「桃栗三年柿八年」がある。これをもじって日本人が英語を習得する困難さを自ら嘆き、「前置詞三年、冠詞八年」と表現されてからどのくらい年月がたったものか。冠詞はそもそも日本語に存在しない思考パターンからくる表現形式であるので、理解・習得が難しいであろう。いっぽう前置詞に関しては、日本語に「前置」ならぬ後置詞である助詞が存在するために、そこからの安心感で三年としているのか。前置詞の習得の困難さが、冠詞と比較してより少ない要因は、動詞句や前置詞句の中に前置詞を組み込んだ状態で、丸暗記しているためであろう。前置詞そのものを理解する方向ではなく、どの動詞にはどの前置詞が後続し、どの名詞にはどの前置詞がつくのかと、英語学習者はひたすら暗記し続けることになっている。高等学校における英文法の準教科書を開いてみると、前置詞と前置詞が含まれる慣用表現の項目、そして問題演習を含めて4頁から6頁程度の扱いである。教育現場では、大学受験をするために英語の知識をある程度増やす方法として、文法・語法の問題集をひたすら解かせ、できない部分はやはり丸暗記というのが大半であろう。

外国語である英語を学習者が知識として身につけるレベルは母語話者ならば誰もが迷わずに使用できるレベルであろう。しかし、母語話者が無意識にできるレベルを明示化すること

は想像以上に困難である。昔、ある英語の教員が「だれでも歩くことはできるが、歩くときの筋肉の動きを説明できる人は少ない」と語っていたが、それはまさに、語学教育の困難さを大いに言い当てていると思われる。

1. 辞書・文法書：英語母語話者の視点

本節では、英語母語話者による英語語法・文法書における *at* の記述を確認し、問題解決の糸口を探っていくことにしたい。

OEDの *at* の項目の総論部分にこのような記述がある。

At is used to denote relations of so many kinds, and some of these so remote from its primary local sense, that a classification of its uses is very difficult.

最初に「場所」の意味がありきで、そこからさまざまな関連の意味が派生したのだが、*at* の用法を分類するのが困難を極めている様子がここからも手に取るように分かる。

英単語の戸籍簿とも言われるOEDの記述をここで簡単に確認しておく。*at* の語義は廃語・廃用を含めて41項目に分類されているが、総論部分に次のような記述がある。

The arrangement of the senses here adopted is:—I. Local position. II. Practical contact, engagement, occupation, condition, etc. III. Position in a series or graduated scale, rate, price, etc. IV. Time, order, consequence, cause, object. V. In other adverbial phrases. VI. With the infinitive mood. VII. Followed by other prepositions.

ローマ数字で大きく7つに語義を分類している。最初は、他の基本的な前置詞の *in* や *on* と同じように「場所」の意味がある。二番目は比喩的な用法で実際に道具を使ったり、作業をしたり、ある状況を表現する際に、その事態を場所として捉えている表現である。三番目はさまざまな程度を目盛りの点として認識する、これもまた最初の語義からの比喩的用法である。四番目は時に関するものを空間に写像して考えるこれもまた比喩的用法である。五番目の語義は *at* で始まる前置詞句でイディオムとして一括している。六番目の用法は現代語では廃用となっている、*at* に動詞の不定形が後続するものである。最後の七番目のものは *at about* といった二重前置詞の用法を分類している。

同じ Oxford系の辞書であるPOD11版では、つぎのような語義に分類されている。興味深いのは空間に関する語義と時間に関する語義を統一的に扱っているところである。ここで最も重要な鍵概念は二番目の定義項にある POINT である。語義は一見親切に細分化している

よりも、その語の意味は一体何であって、何でないのかを明確にして理解の軸に据える方が、全体像が把握できるものである。ただ、最近の POD は例文が極端に少なくなっているので 7 版以前（5版が定番であるが）のものが、お勧めである。

PODのatの語義

1 location, arrival, or time. 2 a value, rate, or point on a scale. 3 a state or condition. 4 direction towards. 5 the means by which something is done

また、今からおよそ120年前のSweet (1891:139) では、前置詞全体の意味について具体的場所を中心義および基点とし、そこから抽象的な場、さらには時間の場という意味拡張を経てきたとまとめている。

Thomson, A.J. & A.V. Martinet (1986) は日本人のための英文法書ではないが、自動詞と他動詞の見極めの困難さ、さらに前置詞の使い分けの困難さを指摘している。

The student has two main problems with preposition. He has to know (a) whether in any construction a preposition is required or not, and (b) which preposition to use when one is required.

さらに Leech (1989 : 53) では、以下のように at に2つの意味を認めていることが分かる。場所が先に明示され、その後に時間が示されている。これは、目に見えない時間に比べて、より具体的で、より知覚されやすいのは、視覚情報であり、見たままを直接表現しえるのが「場所」用法になる。このことは、in や on の基本的な前置詞すべてに共通の意味の派生方向である。英語だけにとどまらず、日本語にも共通にみられるものだが、これは人間が何かを認知する際に、何を前提としてその存在をより深く理解するかという過程に基づいた自然な現象である。

At is a common preposition with two main meaning. *At* indicates a position in space; and *at* indicates a point in time.

次のような記述も「時」を「場所」に見立てている。まさに、メタファーである。

At is also used for other points of time, or “Stages” of the day.

E.g. at the moment, at lunch time, at midday

本稿では、詳細は後述するが、次の註に相当する現象の指摘は、クリスマスやイースターは本来24時間単位の日付に相当する時間の区切りなので、前置詞は *on* が要求されそうだが、現実には *at* が要求されている。英語母語話者の学者でさえもこれを例外事項として扱っているのは興味深いものである。

NOTE: Exceptions are uses where *at* refers to a period of time. Here *at* is similar to DURING.

E.g. (i) *at* + time: At that time we live in Lagos.

(ii) *at* + special times of the year: at Christmas, at the New Year, at Easter.

(Here the period can be more than one day.)

2. 空間に関する語義

さて、ここから各論となる。意味の派生の順序を考慮に入れ、より原義である空間における「地点」の語義から考察を始めることにする。

たとえば、中学生用の英和辞典の *live* の項目や和英辞典の「住む」という項目を見るとその例文の中に、“live in” が使用されているのが大半であろう。そうした中で、『ハウディ和英辞典』で、「妹はいまおばの家に住んでいます」の英語表現に *My sister is now living at my aunt's (house) [with my aunt].* という例文を提示している。しかし、註の部分で *live* の進行相について言及しているだけで、前置詞 *at* について言及がない。ここでは、自家製コーパスの例文を言語資料として述語動詞 *live* と共起する前置詞に関してまず考察を進めていくことにする。

例文(1)と(2)は場所の明示の最小単位である「番地」まで言及しているので *at* が使用されている。番地が明示されず単に「通り名」だけでは *on* となる。*at* は番地という位置そのものを指示するが、*on* は通りに接しているだけで、通りそのものではない。同様に *in* も容器のイメージから何かの範囲内を示し、ケニアが名詞として後続するので、ケニアの境界線の内側を意味し、ケニアの場所そのものを示すわけではない。この場所を意味する *at*, *in*, *on* という説明は時間表現の学習項目で言えば、ちょうど時制 (*tense*) と相 (*aspect*) を同列で扱っているのと同じ誤りを犯していると思われる。このような文法の誤解も前置詞の習得を遅らせる要因となり、最終的には丸暗記に学習者は追われることとなるのだろう。

(1) “And you live at¹ number twenty-seven Bacon Road in Bow, East London.”

(Archer Jeffrey, *A Prisoner of Birth*)

(2) “Listen to me,” he demanded in a loud whisper, ” and listen good. We know you’re

married and you live at 1161 Forrest Drive. (Grisham John, *A Time to Kill*)

(3) “I used to live on Clarence Street,” said Nick.
(Alexander McCall Smith, *Unbearable Lightness of Scones*)

(4) “Are you married or do you live in Kenya?” (Michael Crichton, *Congo*)

さらに辞書や文法書によくある記述に、小さな場所には at を使い、大きな場所には in を使い、その中間の大きさには on を使うといった漠然とした方針を示しているだけのものもある。すると次のような2つの場所を示す in句の連鎖現象をPoint Reyes Stationにつく前置詞は at や on になるのではないかと、英語非母語話者は考え込んでしまうのである。

(5) “And you live in Point Reyes Station in Marin County?”
(Philip K. Dick, *Confessions of a Crap Artist*)

Thomson, A.J. & A.V. Martinet (1986) の説明にあるように、「内側」というよりもむしろ「この点」といった (6) の定義文には、何であって何でないのかという対立項を組み込んで示すのが最も有効であろう。「定義する」の define は「制限する：limit」や「終わらせる：finish」が語源である。つまりそれとそれ以外の部分を切り分けることである。反対に定義したつもりであっても、その区切りが明確になっていなければ、その定義は十分には機能しないのである。

(6) But a small area such as a square, a street, a room, a field might be used with *at* when we mean “at this point” rather than “inside”.

at the sea/ river/ lake ect. means “near/ beside the sea.” But at sea means “on a ship”.

(Thomson, A.J. & A.V. Martinet (1986:98))

(6) で提示された “at the sea” の事例について、ひと言つけ加えておくことにする。sea に限定を意味する定冠詞を付けるか茫漠たる意味のゼロ冠詞にするかによって解釈が異なる。まず、境界が意識できない海、具体的には海岸線から遠く離れ海のと真ん中つまり船上という解釈が、まさに茫漠たるイメージがゼロ冠詞なので、at sea と表現される。とくに (7) の例文では沿岸との対比がよく出ている。それに対して、境界が認識できる海とは、海岸線

が目の前にあることで、海岸線沿いを意味する。つまり共通認識に定冠詞の世界である。(8) では陸地であることが理解できる。

(7) We listened to the weather report, and it gave an important warning to all ships at sea or by the coast. It said they must run to safety as soon as they could.'

(Enid Blyton, *Famous Five* 19)

(8) I suppose she is waiting at the sea now while Papa gets tickets.

(Gregory Boyington, *Baa Baa Black Sheep*)

(7) の at sea の解釈は主語に生起するものが航海中か、もしくは航海中にそのような事態が発生していることを意味する。前置詞 at の目的語である sea がゼロ冠詞であることが後押しし、それは特定化された海ではないが、しかし at に後続するために総称的な意味でもない。anyの意味の free choice といった任意の海でもない。可能性の世界ではなく現実世界の問題であるからである。よって、at sea の解釈は弱音の some と同じように、存在のみを意味し、その量や数など確定した部分は言及していない表現である。また、このような解釈は at だけの問題ではなく、時制や限定詞を含む at句との関係で発生する問題である。

Quirk *et al* (1985:673) においては、前置詞の意味は空間や時におけるそれぞれの関係や、ほかに道具や原因などとの他の関係を表すとしている。atをゼロ次元として考え、at the bus stop、at the North Pole そして at the end of the road という例を挙げている。言うまでもなく、現実世界で面積を持たない点は場所として存在せず、我々人間があくまでも「点」として感じている部分が大切な部分であろう。

この感じ方はまさに主観性であり、たとえばニューヨークのような大都会であっても地球規模で地図上の一地点を扱う場合は、そこに面積を感じる必要はなく、携帯端末やカーナビの GPS の場所情報と同列に考えることが出来るのである。(9) の例文のように、現実には、影も形もない面積を持たないニューヨークは存在するはずもなく、現実にはニューヨークの事務所だったり、ニューヨークの駅だったりするのである。

(9) It was handed in yesterday at New York. (Dorothy L. Sayers, *Clouds of Witness*)

主語に話者が含まれていて、なおかつ具体的な動きを表す動作動詞の場合は、その大きな場所の地名は in が要求される。それは空間が必要だからである。反対に話者が主語ではなく、その場所から離れていてなおかつ存在を示す述語動詞の場合、広がりを表す意味がなく、単

に地図上の点だけが情報的に有益となるために at も使用可能となる。

Quirk *et al.* (1985:676) では興味深いパラフレイズを示している。

(10) Note the following difference between at and in:

She's $\left\{ \begin{array}{l} \textit{at Oxford. [She's a student at Oxford University.]} \\ \textit{in Oxford. [She's staying, etc in the city of Oxford.]} \end{array} \right.$ ²

後者 in の解釈が進行相で表現されているのが示唆的である。つまり状態ではなく一時的な動作・活動を意味しているわけで、その動作・活動には空間が必要となってくる。一方、at の文の意味的な書き換えは所属を意味していて、ある空間の内だとか外という観点はなく、ただどこにいるのかを問題にするために地点を意味する at を使うことになる。

日本の前置詞研究では、小西 (1964:98) において、at の原義を「At はあるものの接触する地点を示し、その地点としての場所そのものを予想させる語である。それに対して in は「あるものの内部に」という意であるから、その中のどこかに位置することを暗示している」と述べている。

具体的には、He is in the house.は彼が家の中のどこかに存在している意味であり、He is at the house.は彼の存在が家の場所に指定されるだけで、他の情報は示してはいないことになる。つまり、存在のあり方は文脈や百科辞典的知識によって絞り込まれていくことになる。

対象から離れると、小さく見えて、対象に近づくと大きく見える。人間が経験から身につけた感覚である。これが、at と in の使い分けに重要な心理的な要因を生むことになる。また、当該のモノに慣れ親しむとその情報量が多くなり、大きく感じ、反対に情報量が少ないと矮小化の傾向にあり、最終的には大きさを持たない点まで収斂することになる。

これらを裏付ける事例を2つ見てみよう。(11) の例文ではここではなく、何かを越えるという距離感を示す over と at との共起現象が示唆的である。ただし、ここで注意が必要なのは、距離感があることが at を使用する必要条件ではないということである。後述するが here との共起関係も可能である。問題は場所を広がりあるものではなく、「点」として認識するかどうかの問題にかかっているのである。また、前置詞 in が使われている例文 (12) では、家にいるか、いないのかという問題であり、家の内か外かが重要な情報となる。

(11) The Bensons came down to the shore early this summer and Jackie is over at the house all the time. (J. D. Salinger, *A Boy in France*)

(12) She put herself in his place, and realised what it would be to him if he were in

the house at such a time.

(A. Conan Doyle, *A Duet*)

コミュニケーションの重要な役割は相手にとっての価値ある情報の提供である。話者は聴者に何を知ってもらいたいのか。その内容によって言語表現を変えていくのである。相手が近くにいる状態で、自分を見つけてもらいたい場合、詳細な情報が有益な情報となる。その段階で、ホテルの中か外かが重要となる。つぎの例文もタクシーの位置づけが重要で、それがホテルの所、つまり隣接した場所であり、ホテルの建物をGPSで検索した場合、一致はせず、隣にずれることになる。また、当たり前だが、小さなものの前には at、大きなものの前には in といったような、単なる大きさの違いでは前置詞の使い分けが説明できないことを物語っている好例であろう。

(13) You will have to wait in the cab at the hotel, while I go and get some money.

(Pelham Grenville Wodehouse, *A Damsel in Distress*)

(14) の事例は、先行文脈で、「ホテルの周りを武装した護衛たちに包囲されている状態」での場面である。ホテルに足止めを食らっているので、ホテルから出られなくなっている。つまり内、外の対立が意識されている。

(14) ...it was obvious that many people had been stranded in the hotel overnight and had ended up sleeping in the lounge or the bar.

(Jeffrey Archer, *A Quiver Full of Arrows*)

inに対立する概念が outside であるが、それが言語化したのが (15) の事例である。ホテルの中から外を眺めるイメージで読むところであろう。単に物理的な位置の問題ならば、at the hotel でも問題ないが、「視点」を意識すると outside the hotel と at the hotel は異なるものである。

(15) The six Mercedes drew up outside the hotel and the colonel guided his charge through the swing doors and past reception.

(Jeffrey Archer, *A Quiver Full of Arrows*)

次に先行研究によって提示された、さらに微妙な問題を孕んだ現象を紹介し、検討していくことにする。Herskovits (1986:128) に次のような説明がある。

(16) Note that one will not say *Joe is at the bush* if Joe is lying next to the bush:....

つまりジョーが茂みの横で寝ているときに、*Joe is at the bush*とは言えないのである。距離が接近しすぎると at に有意義な意味を得ることが出来なくなる。つまり近接の状態では、どこにあるかではなく、どこにどのような状態であるのかといった詳細な情報が有意義なものとなる。

続いて、限りなく非文に近い例文 (17) を見てみよう。

(17) *? The freeway is at the lake. (Herskovits (1986:129))

The freeway は、物理的には有限であるが、人間の視線で考えるとその始点と終点を同時に認識できないような「無限」と感じるために、at により「点」としての the lake と場所的に同一視できないので、The freeway の位置づけとして容認度が極端に下がっているのである。しかし (18) の適格文は、前提となる the freeway が線としての認識でなく、点として捉えられている。それが可能になるのは、何かによって区切られた境界線が認識できる場合である。Herskovits (1986:138) の考察によると、通りの交差したところ (crosspath) との解釈になると言う。まさに交差点は、「点」と認識されて、位置づける基準点と位置づけられるものが場所的に一致したことになる。

(18) The gas station is at the freeway.

このような線や面が点として認識される現象は、英語を日常的に触れているとよく見受けられる。例えば、次の (19) から (21) の surface に対する前置詞の選択である。(19) は、「ここかしこに、湖の水面には純白なスイレンがありました」というわけだから、広がりとしての面が必要条件となり、従来通りの on が要求されている。それに対して at が要求されている文脈は地面や海面に対して何らかの上下の運動が予想され、その「地面」や「水面」という地点を問題にしているシーンである。(20) が穴掘りのシーンで (21) がダイビングのシーンである。

(19) Here and there *on the surface* of the lake were pure white water lilies.

(Robin Cook, *Chromosome 6*)

(20) The digging got easier after a while. The ground was hardest at the surface, where the sun had baked a crust about eight inches deep. (Louis Sachar, *Holes*)

- (21) Panic swept over me like an ocean tide. I searched through the fogged mask for my diving partner. Where was she when I needed her? Finally, I spotted her swimming up at the surface, near the boat.

(R. L. Stine, *Goosebumps - Deep Trouble*)

さらに興味深い類例を紹介しよう。エレベータのように移動可能な場合、選ばれ止まったその階を「点」と認識しているので at が要求される。一方、(24) のように小さな部屋は二階にあるといったような移動しない単なる場所を表す場合は on が選ばれるのである。

- (22) When they arrived at the third floor, they walked silently down the corridor and went into Room 315.

(Sidney Sheldon, *Nothing Lasts Forever*)

- (23) There was a soft electronic bleep, and the door slid open at the third floor.

(Michael Crichton, *Congo*)

- (24) He ran down the corridor and up the stone steps to a small room on the second floor that he had booked earlier that morning.

(Archer Jeffrey, *A Prisoner of Birth*)

さきほど本節の冒頭で、前置詞 at、in そして on の意味の特徴を時間表現の時制と相の違いに例えたが、ここではさらに一步踏み込んで、考察していこう。これら3つの前置詞で純粹に地点を表わしうるのは at だけである。残りの in と on は場所の表現で使用されるというだけであり、場所そのものを表わすわけではない。つまり、ある場所での状態を、「モノの内側なのか外側なのか」だとか、「あるモノに接触しているのか否か」を問題にしているのである。また、at のコア・ミーニングである「点」は、数学上の厳密な「点」ではないために、その点の周辺、つまり近似値的な意味を現実には有することになる。これらは語彙そのものではなく、百科辞典的知識、つまりは語用論的な意味の拡張で解釈されるものである。このことを一例ずつ検討・確認して行こう。

- (25) There were people of all ages in the pool, men and women, boys and girls.

(Bukowski Charles, *Ham on Rye*)

(25) は老若男女がプールで泳いでいる場面である。そのためには広がりが必要となって

くるために、点を表わすatではなく容器としての in が適切な前置詞となる。

(26) “How old are they?”

“Seven and ten. They’re great kids. You’ll see them here at the pool.

(Danielle Steel, *Heartbeat*)

「彼らは幾つなんだ?」「17歳。元気なやつだな。ここのプールでやつらを見かけるよ」という対話で here との関係が重要となってくる。あっちではなく、こっち。つまり純粋な場所の提示である。プールの広がり情報は情報上無価値であり、その人たちとどこで会えるのかが有益な情報となっている。

(27) Everyone at the beach was screaming and running, and the men sounded like women. (Joseph Heller, *Catch-22*)

(28) He lay down on the beach, gasping.

(Alexander McCall Smith, *Unbearable Lightness of Scones*)

(27) は「ビーチに居たものはみんな叫び、走っていた。その男たちは女のような声に聞こえた」という解釈になろうが、決してビーチに隣接したビーチでない場所のことではなく、ビーチのまさに「上」にいるわけである。横たわる面に重きが出れば当然、(28) のように前置詞は on となる。

(29) は「あたかも水が敵であるかのように、彼女は湖畔で大きな平たい石を持ち上げていた」という趣旨の文であるが、この場合、主語は湖畔を動き回る解釈にはならない。動く対象ならば、動くための「空間」が前提となるために、線や面を表現する他の前置詞として要求される。さらに、ここで注意が必要なのは、この主語が動いてはならないということではない。直接観察する場合でないような、対象から遠く離れた場所からの発話ならば、動いていようが動いてなかろうが、“at” の使用が可能である。要点は、対象の位置づけを空間内というものではなく、聞き手の想定とは異なるある特定の場所であることを主張する発話である。

(29) She was hefting the big flat stone at the lake as if the water were an enemy.

(Richard Morgan, *Altered Carbon*)

(30) や (31) のように学校や会社など施設に属する場合も at が多用される。それは、空

間上の存在する他の場所との場所の対比であり、なおかつ、そこで仕事や勉強などエネルギーを集中する場所であるので「点」である at が選択される。また、場所の名称は聴き手にとって旧情報の時に、どこにいるのかが明確になる。つまり、at の点とは旧情報たる地点と位置づけられるモノとは特定の場所で位置的に対応関係を成立させることを基本的な機能として発揮するのである。

(30) She was a student at the university, or at least on and off she was.

(Cornwell Patricia, *Point of Origin*)

(31) ..., I was twenty years old and an honors student at the university.

(Joyce Carol Oates, *I'll Take You There*)

ところが、(32) の例文は場所格が主題となって、ネコの世界と人間の世界を対比する構造となって、そのような前提の中で、大学という世界の中では有名な教授だったのだと、ネコの言葉が話せるナカタがネコに説明している場面である。話題がどの領域のことなのか重要となっているので、at ではなく in が使われているのである。

(32) “In the cat world that’s to be expected,” Nakata said. “But in the human world if you can’t read or write you’re considered dumb. Nakata’s father—he passed away a long time ago—was a famous professor in a university.”

(Murakami Haruki, *Kafka on the Shore*)

モノや人間がどこかに存在する意味以外に、意識がどこに向いているのかも at の使用でよく見られるものである。これは、意識が集中し、点へと収斂したケースである。ここでは、look at や aim at のような自動詞ではなく、他動詞で使用され場合が一般的である単語で考察を進めていくことにする。ポイント是他動詞の他動詞らしさであり、つまり他動性は主語が目的語に対して物理的または精神的に、さらには社会的に影響を与える力が内在していることである。そのような述語動詞に at が後続すると他動詞が自動詞化して、実際の「影響」が背景化し、主語がどんな行動を起こしているかに焦点が当たり、さらに出現した at の意味要素である「点的意識」が前景化して、意識が前置詞 at の目的語に向かうことになる。(33) の事例は他動詞で使用されているので、発砲して相手に当たった解釈である。それに対して(34) の事例は、直前の he tried to kill me のところからも類推できるように、殺しそこなったわけで、そして私めがけて発砲したと言っている。この範囲だけでも、相手の意識は私に集中していたが、弾は命中しなかったと十分に読むことが出来る場面である。

(33) Glen Belsnor said, “I shot him. Before he could kill me.”

(Philip K. Dick , *A Maze of Death*)

(34) I think he wanted to kill me. In fact, he tried to kill me. He shot at me!

(Robin Cook, *Coma*)

(35) の例は腕を伸ばしきった状態は、腕を伸ばした長さの最高点となるので、前置詞が at が使われている。遠視か老眼で近くの活字が見えにくくなっている場面である。

(35) Riker held the document at arm's length to read the small print.

(Carol O'Connell , *Dead Famous aka The Jury Must Die*)

(36) の例文は、次節の時の領域に at が比喩的に援用された慣用表現である。「3時間以上も立て続けに寝ることのできる機会のある人を全員憎んだ」という趣旨であるが、「3時間立て続け」という状況を、不定冠詞によって「ひとまとまり性」の意味を体現している。このひとまとまり性がマクロの視点からは「点」として認識できるのである。

(36) In fact, she hated everyone who had the opportunity to sleep more than three hours at a stretch,...

(Nicholas Sparks, *The Wedding*)

(37) の例文は、at hand で「手の一番先の端の所」、そして「手を伸ばせば届く範囲に(ある)」という意味の拡張からくるメトニミーである。さらに可算名詞の hand がゼロ冠詞の状態になっているのも、意味がモノではなくコト的になり抽象度が上がっているためである。

(37) A week passed quickly, and the day before the revolution was at hand

(Dean Koontz, *The Dark Symphony*)

辞書などにも They are at it again. ((夫婦喧嘩などを) またやっている) という事例で出てくる表現である。it はその場の事態で喧嘩やいたずらを意味していて、話者と聴者にとって言わなくても分かる事態を意味している。いわゆる心の中にしっかり存在している対象の it である。(38) は慣用表現に含まれている again が二度目でないことは、後続する文脈でもしっかり表現されている事例である。again が生起している繰り返しに対する不平などが含

意される場合が多いが、生起しない場合は、集中し仕事などに取り掛かっている意味を表わし、(39) のように多くは期間を表わす副詞句が付く。

(38) He was at it again, giving me one of the “street smart” lectures he had given me numerous times in the past. (Cornwell Patricia, *Body of Evidence*)

(39) By late Wednesday afternoon the section chief, whose name was Will, and Marino and I had been at it for hours. (Cornwell Patricia, *Body of Evidence*)

さて、本節最後の現象である。イギリス用法のatは目盛りとしての点であるし、アメリカ用法の to は頁をめくり続けて止まるべく到達点を意味するものである。イギリス用法の行為結果に重点が置かれたり、結果を含意したりするものと、その過程を意識するアメリカ用法とは事態の捉え方の違いであると言えよう。

(40) “Open your books to page nine,” Danny said, hoping he sounded like Nick. (Archer Jeffrey, *A Prisoner Of Birth*)

(41) “Right,” said Ron as they both opened their books at pages five and six. (J. K. Rowling, *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*)

3. 時に関する語義

本節では、時を表現する at の用法について考察する。Quirk *et al.* (1985) による (1) の考察を待つまでもなく、場所を具体的に表わす前置詞の用法がメタファーとして時を表わす用法に拡張したものと考えて間違いのないであろう。日本語でも「9時5分」などの「時刻」は「時を刻む」わけで、そもそも「刻む」とは「切って細かくする」の意味である。物理的には形のない「時」など切ることは出来ないが、目に見える世界のモノに例えて、目に見えない世界を表現している。形のない「時」を刻んで、刻んで行き着くところが「点」となる。そのために時刻は、at が採用されているのである。

(1) Time position: *at, on, in, by*

At, on and in as prepositions of “time position” are to some extent parallel to the same items as positive prepositions of position... (Quirk *et al.* (1985: (687))

「はじめに」の最後に提示した Leech (1989) では例外事項として扱われたものが、Quirk

et al. (1985:688) では (2) の説明のようにイディオム扱いとなっている。どちらにせよ at そのものが考察の対象から外されているのである。ここの示唆的な指摘は、指示対象はクリスマスやイースターといった季節であって日付そのものではないところであろう。24時間単位の曜日とか日付ならば on が使われるのだが、「どの休日なのか」といった1年365日の中の時を指示するために、at が選ばれたものと推察される。

(2) *At* is used for points of time (chiefly clock-time[1]) and also, idiomatically, for holiday periods [2]:

at ten o'clock, at 6.30 p.m., at noon [1]

at weekend <BrE; but in AmE : on the weekend> at Christmas, at Easter [2]

Quirk *et al.* (1985:688) でも若干の言及はあるが、at night と in the night の違いを小西 (1970:233) では、in London を at London と表現する感覚に類似と述べている。また、OEDを引用して in the night は午後6時から翌午前6時までであり、at night は午後6時から午前0時まで。さらに at night は in the morning の反対であり、in the night は in the daytime の反対になることを紹介している。

しかし最も重要なことは、前置詞の at と in の違いに目を向けることである。「容器」という空間の領域を night に意識化しているのなら、in the night になる。それとも茫漠と広がりのある night をその瞬間、瞬間に任意の時点として捉えているならば範囲を意識しないゼロ冠詞の at night となる。さらに in the night の世界と in the daytime の世界のどちらの容器にその時存在しているのかという感覚と定冠詞からくる丸ごと全体像が認識できるような the night なのかの違いも考察の対象となる。そのために、in the night は at night のように単に「夜に」の意味の他に、「夜の(明けない)うちに」といった within the night の意味も出てくるのである。具体的な例文を挙げよう。まずは、(3) は頻度として多い at night の例文である。範囲を決めず、ただ「夜」という時間を提示しているだけである

(3) Even at night, the jungle was warm and humid.

(Christopher Golden, *King Kong*)

それに対して、in the night の例文は「夜→昼→夜」と変化がある中で、次の変化前という時間の流れといった時の空間として認識した場合の表現となっている。

(4) By next morning, however, the snow that had begun in the night had turned into a blizzard so thick that the last Herbology lesson of the term was canceled:

(J. K. Rowling, *Harry Potter and the Chamber of Secrets*)

(4) の事例は「夜が明ける前に降り出した雪」のように直前の *by next morning* との連関で、より一層時間の切れ目が意識される場面であろう。さて、次の事例を見てみよう。

(5) If Renn sometimes woke in the night from dreams of eagle owls and tokoroths, she soon went back to sleep. (Michelle Paver, *Oath Breaker*)

「ワシミミズクやトコロスの夢で朝になる前に何度か起きたとしても、また眠りについた」という場面だが、通常起きるのは朝になってからで、その前に起きてしまうという *in the night* の世界と *in the daytime* の世界の境界線の時間を意識した表現となっている。次の最後の例は、夜を点ではなく、時間の広がりのある対象として捉えることで、何の音もしなかったという時間の流れを示すことが出来る。

(6) There was not a sound in the night. (D. H. Lawrence, *Collected Short Stories*)

4. 比喩的表現である拡張事例

本節は、文法書などにはイディオムや慣用表現ということで、*at* の語義が封印され考察が保留されているいくつかの *at* が含まれる句について、前の節までの知見を援用して解説を試みたいと思う。ここでは、いわゆる慣用表現といわれているものを扱うので、念のため例文にはすべて和訳を付けることにする。

まずは、日本語にもなっている *at random* から見ていくことにする。POD11版によると *random* とは “done, happening without a deliberate order, purpose, or choice” と定義されている。事態の発生は毎回独立していて、意図性もなくその一回一回は、点として認識しているために *at* を選択することになる。

(1) Amory threw his coat and hat on the floor, loosened his collar, and took a Wells novel at random from the shelf. (F. Scott Fitzgerald, *This Side of Paradise*)

(エーモリは床にコートと帽子を投げ捨て、襟を緩めてから書棚から適当にウェルズの小説を一冊手に取った)

つぎは、*at work* と *in work* の意味の差異を確認したい。まず *at work* は仕事という行為(モノではなくコト)に意識を向けていることで、「工作中」や「従事している」という意味になる。それに対して、*in work* は前置詞 *in* によって「容器」のイメージが出て、仕事があ

るか無いかという対立が生まれる。(3) の例文からも分かるように学校を出てから失業をせず仕事に就いているという意味で、この瞬間、工作中かどうかを言っている訳ではない。

- (2) Elizabeth had been at work in the city when she heard the explosion and looked out of her window to see the flames belching from the World Trade Center.

(Jeffrey Archer, *A Prison Diary*)

(エリザベスはニューヨークで仕事に爆音を聞き、トレードセンターから炎が出ているのが自分の所の窓から見えた)

- (3) “But Cartwright doesn’t have a criminal record, he’s been in work since the day he left school, and he was about to get married to his long-term girlfriend who just happens to be pregnant.” (Archer Jeffrey, *A Prisoner of Birth*)

(しかしカートライトには前科はないし、学校を出てからはずっと職に就いていて、長いこと付き合っていたガールフレンドは、たまたま妊娠していて、その人とまさに結婚するところだったので)

次は一文の中にコンパクトに2つの at 句が生起している例である。まず at will は文尾に生起して「思いのままに、自由に」の意味となるのだが、これは意思以外には集中することがないのだから、結果的に自分の意思のみに従って突き進むことになる。そもそも、leisure は仕事などから解放されたゆっくりした時間であるので、at によって、十全たる自由を満喫することになる。さらに、等位接続詞の and によって等位構造を対として形成された at will との意味的な連関の自然である。

- (4) The mind is not a book, to be opened at will and examined at leisure.

(J. K. Rowling, *Harry Potter and the Order of the Phoenix*)

(心は本ではない。思いのままに開かれるものであり、ゆっくりと吟味されるものである)

(5) の at large を考える上で、そもそも large の状態とは small という狭い範囲に押しとどめられてはいず、無限に広い状態に在るということである。主語は移動可能なものなので、一瞬、一瞬、映画のフィルムの一コマ、一コマで見れば、どこかの地点に存在し、その領域が LARGE (無限に広い) なために、訳語として「捕まらずにいる、自由・全体としての」のよう意味が文脈に応じて訳出が可能となるのである。

- (5) The invaders had penetrated the Centre itself and were now at large somewhere

in this very building.

(Greg Cox, *The Eugenics Wars*, Vol. 2)

(その侵入者たちは中央を貫通突破し、いまやまさにこの建物のどこかに捕まらずにいるのだ)

今回の考察で主として使用した自家製コーパスはおよそ 6000万語で構成されていて、その中で *at liberty to* のフレーズは79回出現した。さらにそのうちの61回は否定文で使用されている。否定極性表現とまではいかないが、否定の中で好まれる表現と言えよう。なお、*liberty* は監禁されていない状態、解放されている状態なので、その時点で何らかの束縛からの自由を得ていることである。

(6) I am not at liberty to disclose.

(Jeffrey Archer, *A Twist in the Tale*)

(勝手に暴露はできなんいだ)

(7) の *at bat* の表現のポイントは可算名詞の *bat* がゼロ冠詞になっているところである。それは丁度 *go to bed* の表現と同列にモノからコトへ抽象化が進んでその名詞から容易に連想される事態を意味することとなる。野球においてバットを使用するのは守備ではなく攻撃であるので、そこに意識を集中している最中のことを意味する。よって攻撃中の意味となるのである。

(7) Then we were at bat in the bottom of the 7th. (Bukowski Charles, *Ham On Rye*)

(そのとき、僕らは七回裏の攻撃中だった)

このように慣用表現と言われているものであっても、*at* のコア・ミーニングの「点」を中心に論理的に考えてみれば、句を形成する単語同士の意味的な拮抗から生じた意味は、いたって自然なものであると判断できる。

5. おわりに

本稿は英語辞典や語法・文法書における *at* の意味の扱いの問題点を取り上げた。また従来から提案されている *at* のコア・ミーニングである「点」を手掛かりに、慣用表現として処理されていた *at* を含む動詞句や前置詞句を改めて *at* の意味を英語学習者に納得いくように説明を試みた。さらに学習者が理解していると思込んでいる「点」のイメージの *at* と「容器」のイメージの *in* を比較することで、より一層、「点」とは一体何なのか、また「容器」のイメージとは何なのかを、自家製コーパスから例文を提示し、実証的に *at* の意味について考察を深めた。最後に、本研究は英文法・語法の発展、辞書の記述項目への資料提供、

さらにインターネットへのPDFで公開を視野に入れているので、一般の英語学習者への学習支援も考慮に入れているものでもある。

-
- 1 例文中の下線部はすべて筆者による強調である。
 - 2 etc in the city of Oxfordの表記において etc の後にピリオドがないのは原典のままである。

参考文献：

- Herskovits, Annette 1986. *Language and Spatial Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 小西友七 1964. 『現代英語の文法と背景』 東京：研究社.
- 小西友七 1970. 『現代英語の文法と語法』 東京：大修館書店.
- 木内修 2005. 「Onの多義性：認知意味論の英語教育への貢献」『日本英語英文学』 Vol.15. 1-13. 日本英語英文学会.
- 木内修 2006. 「空間認知とイメージ・スキーマ：A Case Study of *in*」『東洋大学大学院紀要』 第42集 329-342. 東洋大学大学院.
- Leech, G. 1989. *An A-Z of English Grammar and Usage*. London: Edward Arnold.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Sweet H 1891. *A New English Grammar, Logical and Historical*. Clarendon Press, Oxford.
- Thomson, A.J. & A.V. Martinet (1986) *A Practical English Grammar* (Fourth edition).

辞典文献：

- 『講談社ハウディ和英辞典』 2005³. 東京：講談社.
- Oxford English Dictionary*, 1989². Oxford: Oxford University Press.
- Pocket Oxford Dictionary* 2013¹¹. Oxford: Oxford University Press.

A semantic study of the preposition *at*

KIUCHI, Osamu

The purpose of this paper is to clarify the meaning of *at*, making skillful use of “a point” as a core meaning which is a basic tenet of the preposition *at*. This paper attempts to indicate defects in aspects of meanings of *at* in the English dictionaries and reference books on English usage and to make the reader grasp the meaning of *at* which phrasal prepositions and prepositional verbs take, with the help of “a point”. It is very tough to understand the idea of “a point” without the idea of “a container” just like the core meaning of *in*. So we claim that the reader should understand a contrastive relationship between POINT and CONTAINER in order to understand perfectly well the meaning of *at*.